**CAN-DO リストによる到達目標**

　前ページの一覧表は，*NEW CROWN* を用いて学習を行った場合の各学年の到達目標の一例を示している。

元にしているのは， 欧州の言語教育の共通枠組みであるCommon European Framework of Reference for Languages (CEFR) を日本の英語教育に適用したCEFR-J のβ版である。CEFR では，技能は「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」といった伝統的な4 技能ではなく，「話すこと」を「やり取り」と「発表」に分けた5 技能となっている。つまり，「話すこと」が，相手と交互に話す「やりとり（英語では，Spoken Interaction）」と，話し手がある程度のまとまった量を継続して話す「発表（英語では，Spoken Production）」とに分けられている。なお，ここで示した到達目標は，CEFR-J を元に*NEW CROWN* の言語活動の要素を取り込んで部分的に改変したものである。また，CEFR 同様に行動目標が記述されていて，言語的な規定が記述されていないが，使用する言語材料はそれぞれの学年終了時までに学んだものとする。

　実際に授業でやっている活動（あるいは，やってきた活動）は，これより幅広く，またレベルもこれを上回っているように見えるかもしれない。しかしながら，これらのディスクリプターは学習者が指導者の助けを借りず，（特に断らない限りは）辞書などの参考資料を使わずに「自力でできること」を示している。これは，「授業でやっていること」と「学習者が自力でできること」とが，かなり乖離していることが知られてきているからである。教室内評価や定期試験などでは，直近の学習項目が意識されているが，各学年が終わった時点では，いわゆる学習項目の定着度合いを確認することも必要である。つまり，それぞれの生徒がこれらのディスクリプターをどのくらい達成できているか（言い換えれば，表に示した行動をどのくらい自力でできるようになっているか）という確認も必要だということである。これに関連して，「聞くこと」「読むこと」といった『受容技能』と，「やりとり」「発表」「書くこと」といった『産出技能』では，語彙サイズも乖離していると考えられる。教科書で学び理解している単語でも，実際に話したり書いたりする際に使えるとは限らないのである。

　また，これらのディスクリプターのうち，現実的な言語使用場面に近いものほど，経験がないために難しく感じる可能性があるので，指導においても，こうしたコミュニケーションのオーセンティシティーを日頃から意識しておくことが重要であろう。さらに，技能ごとに成否を見ることで，教師は自身の指導のバランスを確認できることにもなる。

　このCAN-DO リストによる到達目標は，ある意味では，各課の評価規準や評価基準とは独立したものである。*NEW CROWN* を通じた指導と学習の真の成果を，折にふれ検証するための道具として使っていただければ幸いである。